

時代のうねりに

保守政権は持ちこたえられるか

—昭和生れ宰相のなすべきことは—

またも竹下軍団が
キングメーカーに

八月八日の自由民主党両院議員総会において新総裁に選出された海部俊樹氏が、九日の首班指名を経て新しい内閣総理大臣となった。同日発表になった新内閣の顔ぶれを見ても、早稲田大学出身者が五名入閣しているのははじめ、全体的に稲門内閣もしくは私学内閣といった印象が、リクルート事件が東大関を中心にしたけられたスキヤンダルというイメージがあっただけにフレッシュである。

しかし、海部俊樹新総理は、参議院で土井たか子女史が指名を受けたという歴史的事実と先日の参議院選挙では得票数でも議席数で

も第一党の座を獲得したのは社会党であったということに目を向け、総理総裁となったことに単に喜ぶのではなく、これらを心の底から真剣に、厳粛に受け止めるべきであろう。

さて、まず総裁選挙においての感想であるが、キングメーカー田中軍団の後継である竹下軍団が、またもや事実上キングメーカーとなった観は今回やはり否めない。そして、キングメーカーは自分より優れた者を、自分の影響力固持のために絶対に立てないから、首相が最近小粒になってきたような気もする。

そもそも中曽根元首相がニューリーダー三氏の中から総裁を指名する場面でも、候補者三人それぞれ

だが、それまでの総裁の『型』を破る経歴の持ち主だった。宮沢氏が総裁になれば、それは参議院議員からの鞍替え組みが総裁になることであり、過去にその例はなく、安倍氏がなった場合には、過去の総裁に落選経験があった例もない。実際に総裁指名を受けた竹下氏にしても、県議出身者が総裁になった最初の例であったので、これが後に県会議員を奮起させたと言われている。

ところが、先に総裁候補に上がった、海部、林、石原の三氏は、前出のニューリーダー三氏にあっては経歴さえ未だ満たしていない。党の三役はおろか、大蔵、外務の今までトップへの階段として不可欠と考えられてきた大臣ポストの経験もない。確かに、この三氏に橋本龍太郎氏が加わってれば、橋本氏一人が党三役の筆頭である幹事長経験者となるわけだが、竹下派の分裂と急速な世代交代を避けるために立候補を断念せざるを得なかった。しかし、今回の組閣でいち早く大蔵大臣のポストを与えられたのは、今だ五十二歳の橋本氏が将来、竹下派を再び表舞台

に引き出す可能性を色濃く示すものと考えてよいだろう。仮に、表向きに両院議員総会における無記名投票で決した今回の総裁選びが、『無記名』という多少オーブンな形式をとり、そのために海部氏二七九票、林氏一二〇票、石原氏四八票、無効票四と四〇%近くの批判票が海部俊樹氏に対して実数として示されたことを、密室からやや顔を出した民主的な方法だったとある程度評価できたとしても、候補者選びのプロセスにおいて、やはり今まで通り派閥の論理が優先したことは国民の目にも明らかである。しかも、その派閥の論理で選んだわりには国民をうならせる程の人物候補を出し得なかったことは、自民党自体が何となく先細りである印象を与えるものだ。それでも、海部氏が就任のあいさつで述べたように、これで自民党は再生できるのだろうか。

真剣に政治を

「考える」時代に

だいたい今回の自民党の状況が、リクルート事件や消費税問題

によるとするのは短絡的すぎる。私は言いたい。そこには大きな時代のうねりがあり、そのうねりに巻き込まれて今回の政治状況の大地ができ上がり、リクルート事件や消費税問題が単にその起爆剤として作用したと考えるのが順当ではないか。

先日の参議院議員選挙における自由民主党の予想以上の大敗北にしても、それは日本戦後政治史上の一大転換期を意味し、昭和から平成へと確実に時代が変わったことを暗示するものだった。ここで、この参院選の意味するものについて考えてみたいと思う。

参院選の結果から感じたことは「日本型民主主義は着実に育っており、国民も政治家も真剣に政治

海部首相



を考えると、戦後さまざまな政治

「あそここの事務所では、あつちよりもいいものが出た」などというレベルで投票行動が左右されるか真実は別としても、それがしばしば噂にのぼる度に、日本に健全な民主主義が根ざし得るのかが憂慮されたものだ。

しかし、今回の参院選の結果に示されたものの中で一番感動的だったのは、反自民の票が乱立するミニ政党に割れずに日本社会党に効果的に集中したことで、政党支持の確に表す比例代表区選挙においても、自民党の千五百三十四万票に対して社会党は千九百六十九万票を獲得して、自民党の比例代表区当選者十五名に対して社会党の比例区当選者は二十名であり、自民党は結党以来はじめて得票数でも議席数でも、国政選挙の

結果として第一党の座から滑り落ちた。そして国民に対しても、今まで決して有り得ないとだれもが疑わなかった「野党連合政権」の構想を、一夜にして現実味のあるものとして印象づけた。

今回の選挙は自民党にとっては「国民大衆を恐れ、国民大衆を敬え」との故三木武夫氏の座右の銘そのものであり、主権者たる国民にとつては、自分達の一票の尊さ、重さを自覚させるものであつたらう。その意味で、日本の民主主義は、政治的無関心の時代を打破して、政治家も国民も真剣に政治を考える時代へと移り変わってきたのだ。

ビジョンなく

消費税のみに走った

民主主義とはそもそも、多数の異なった価値観を認めて、全体のコンセンサスの中でその方向性を決めてゆく政治体制である。故に、社会主義や共産主義のイデオロギーも何らかの形で消化吸収してしまいう性質も持ち合わせている。たとえば、高福祉社会を目指して、福祉の増大をはかることは

社会主義的であり、不公平税制の是正をと求めて、もし庶民中心にそのための税制改革をとえれば、当然、所得の再分配を間接的に論じることになるから共産主義的な政策を民主主義の枠組みのなかで考えることになる。それ故にイデオロギー論争は国民にアピールせず、与党自由民主党には必然的に、一般国民から見ても包括的で、何でもやってくれそうな政党というイメージが与えられてきたのだ。

それに加え、戦後復興期という一つの時代にあつては、高度経済成長による『富国』が国民統合の政治目標としてコンセンサスを得ており、国民生活における共通した一大政治目標であったので、これが国内における全国的な、政権を覆すほどの大政治論争の発生に「歯止め」をかけ、自民党の一方支配を支える最大の要因となっていた。

ところが、オイル・ショックを期に、高度経済成長は頭打ちになり、国民生活も量より質と言われる時代に入つて、自民党政権を支える片翼であった「高度経済成長」

という全国的コンセンサスの看板が消滅してしまつたので、今回のうねりが起き始めたのである。

内容はどうか、中曾根内閣には、『戦後政治の総決算』という政治目標のスローガンがあり、少なくとも中曾根氏自身、戦中世代最後の首相として、一つの時代にピリオドを打って、新しい時代に橋渡しすることに使命感を持っていたはずだ。

ところが、その節目が尾を引いて現在に至っている。中曾根氏が次世代に提起した課題が一般間接税の問題であつたわけだが、それを引き継いだ竹下氏には、次代を担うためのビジョンも使命感もなく、ただただ党内最大の派閥を背後に、消費税法案を通すことを条件として中曾根氏から総裁に指名されて『我が道を行』つてしまつたのである。この時から自民党の急降下が始まつたと言える。

その不信、不安の中で竹下政権は、数にものを言わせて消費税法案を単独強行採決し、折りもおり発覚したリクルート問題が拍車をかけて国民の感情を逆撫でした。しかも、四月から一方的に実施された消費税は、日に日に消費者たる国民、とりわけ主婦に実感として拒否反応を焚きつけ、一気に自民党政権に対する不信、不安、不満が爆発したのである。

海部保守政権は 正念場に立った

さて、こうなると今まで自民党を支えるもう一つの土壌であつた、日本におけるイデオロギーの不在という政治体質までもが、今度はイデオロギー論争ゆきの現実路線重視の姿勢と土井たか子委員長を前面に押し出した大きなイメージ転換をはかった日本社会党に有利に働くことになる。

初めから国民は自由民主主義というイデオロギーにこだわつていたわけではないから、共産主義政権になりさえしなければ、社会党に政権を取らしても良いとすら多くの有権者が考え出したのだ。そして現に、それなりのインパクトを国民自らが政治に与えた今日、国民の政治意識は戦後民主主義の歴史の中で、最高潮に達した状態である。

このような状況下では、小手先だけの政治改革や税制論議は国民を納得させず、年内にも予想される衆議院選挙でまたもや自民党は大敗を喫することになるだろう。今、海部俊樹新総理に望まれていることは、第一に、自分がこの時代の節目における、新世代の政治家として、その『使命感』と今後の日本のあり方を大きくとらえた『ビジョン』を国民の前に明らかにし、さらに、その上で、消費税の必要性や自民党の派閥の効用・問題点、はたまたそれらの解決作等、今までの古い世代が、あえて避けて通つてきた議論を、誠実かつ真剣に国民に理解してもらふように根気よく、説得力をもつて

歯科用ファイバスコープシステム 「VISIONER-21A」

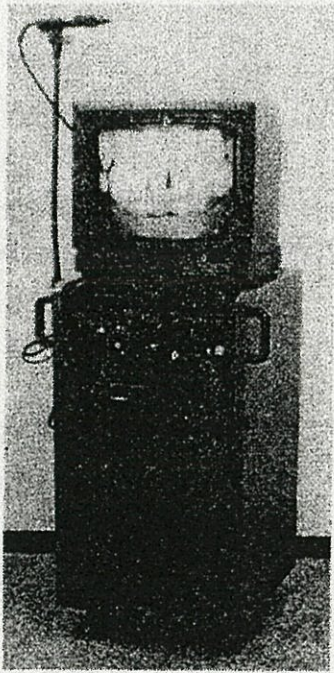
住友電気工業（本社・大阪市中央区北浜、東京本社、東京都港区元赤坂）では、歯科医療機器の専門メーカー、モリタ製作所の協力を得て、世界で初めての虫歯の中を見ることのできる画期的なファイバスコープシステム「VISIONER-21A（ビジョナー21）」を開発し、モリタ製作所から販売を開始した。

現在の歯科医療では、患部を直視するか、デジタルミラーによって観察するか、X線写真による間接的な診断をしているが、これらの方法では見ずらいところがあったり、歯の内部のように直接観察が不可能な部位がある。

このため、歯科医からは、これらの部位を他の医療分野で普及しているファイバスコ

住友電気工業

住友電気工業は、超小型テレビカメラを内蔵したハンドピースと、ハンドピースに着脱可能な数種類のプローブ、およびビデオモニターからなり、用途に応じてプローブを交換使用する。このシステムの開発に当たっては、ハンドピースとプローブを住友電工が得られた情報を記録・再生する画像機器を含む全体のセットアップをモリタ製作所が担当したもので、プローブを簡単に交換するだけで、口腔全体、歯内や個別の歯、歯根内の深部など



技術の開発により可能とし、歯根内の深部まで直接観察できるシステムを共同開発したもの。

このシステムは、超小型テレビカメラを内蔵したハンドピースと、ハンドピースに着脱可能な数種類のプローブ、およびビデオモニターからなり、用途に応じてプローブを交換使用する。このシステムの開発に当たっては、ハンドピースとプローブを住友電工が得られた情報を記録・再生する画像機器を含む全体のセットアップをモリタ製作所が担当したもので、プローブを簡単に交換するだけで、口腔全体、歯内や個別の歯、歯根内の深部など

歯科医療に必要なほとんどすべての部位を拡大画像として観察することが可能である。とくに、住友電工が開発したプローブには、光ファイバを束ねたイメージファイバが使われており、最も細いものは三〇〇〇画素のイメージファイバ、対物レンズおよび照明用のファイバを含めて、直径〇・六九mmとなっている。このシステムは、新潟大学歯学部歯学科保存学第一教室の岩久正明教授による臨床の結果から、世界で初めて歯の最深部を見ることができ、口腔内の診断を容易にするのみならず、新しい歯科医療の道を開く可能性をもつ機器と評価されている。

なお、このシステムは薬事法による医療用具の製造承認を得ている。これによって、これまで歯科治療で患者を見るには、肉眼や鏡を使って見るが、エックス線写真で診断するしか方法がなかった。歯科医の間では、胃カメラなどのようなファイバカメラで患部を直接観察できるようになったのは一大進歩であり、新製品の特徴は、純粋の石英だけから作つた光ファイバをいったん束ねたうえで、引き伸ばすという新手法で、一本六ミクロン、画像を伝えるのに必要な三千本を束ねても〇・三五ミリという細いファイバの開発に成功。それとともに光を送る約五十本の照明用ファイバを一緒に束ね、先端にレンズを装着した点にあり、この検査装置は最も細いものでは直径〇・六九ミリ、先物を口の中に入れて歯の裏側やスキ間、虫歯の病根部などを拡大して詳しく見ることができている。

最近の歯科治療は、なるべく歯の根を残そうとする傾向が強くなり、歯の神経を抜いたあとの部分を正しく診察できれば、正確な治療が期待できるというものである。価格はビデオ装置なども合わせて一セット二百八十五万円、普通の歯科診察台一台分ぐらいに相当する。